

現代家族と「時間」

—— 家族分析への新たな視角をめざして ——

岩 上 真 珠

Contemporary Family & "Time"

— Toward a New Approach to a Family Study —

1. はじめに
2. 家族と「時間」
 - 1) 時間の意味
 - 2) タイミングー行為の共時化
 - 3) 「残余時間の請求者」としての家族
 - 4) ライフサイクルとタイミング
3. 個人・家族・社会変動ーライフコース論と家族研究ー
 - 1) 家族周期論からライフコース論へ
 - 2) ライフコース分析の特徴
 - 3) ライフコースと家族変動
4. 現代家族の分析視角ーまとめにかえてー

1. はじめに

現代家族⁽¹⁾は、二つの点で大きな特徴を有する。一つは家族の集団性の弱化もしくは曖昧化であり、いま一つは家族形態の多様化である。前者を家族の個人化、後者を家族のライフスタイル化と言い換えることもできよう。すなわち、一方において、家族成員の生活領域が空間的にもまた時間的にも個別化し、「ホテル家族」の名称まで登場するようになり、また他方においては、夫婦が別々の生活スタイルをもつ共働き家族、子どもをもたない夫婦、非婚、シングル・ライフといった多様な生活形態が逸脱や例外としてではなく現れ始めた。家族生活は、そ

れ自体を選択するかしないかを含めて、いつ、誰と、どのように営むかを選択する個人のライフスタイル⁽²⁾の問題として認識されるようになったといえる。見方によれば、それは集団としての、また制度としての「家族の危機」とも受け取られよう。さらに、同時代のわれわれが経験している家族現象は、われわれの多くが内在化している「家族」イメージからかけ離れていることが多く、そのことが、家族「危機」説に拍車をかけていることも否めない。

上述のような家族現象の様変わりや、60年代以降、アメリカをはじめとする先進産業社会において特に顕著になってきたといえるが、それにはいくつかの要因が指摘されている。女性の

職業社会への進出とそれにもなう経済的自立、個人の自立や自己実現に高い価値をおく価値観の変化、および少産・少死や平均寿命の伸びによる社会の高齢化である。とくにこの高齢化社会への道程は、どの先進産業社会も不可避免的に経てきたものだが、とりわけわが国ではそのスピードが急速で、西欧社会が4分の3世紀から1世紀かかったたどった道程を、わが国ではたった四半世紀で到達したのである。前代未聞のこの寿命の伸びは、個人に対しても全体社会に対しても、また家族に対しても大きなインパクトを与えた。個人にとって、親の世代の生き方はもはや自らの人生のモデルにはなりえず、3～4倍に伸びた老年期を含めて、自らの持ち時間についてあらためてその意味を問いなおし、人生のスケジュールの組替えを迫られている。個人の人生は、その意味で選択と設計の時代に入ったといえる。

また全体社会にとっては、老齢年金や高齢者医療保障などの社会保障制度の拡充が寿命の伸びに追いつかず、職業、住宅、税金の問題を通じて、若年世代と年長世代のニーズの対立を生み出しつつある。こうしたなかで、家族関係も必然的に変化してきた。親子関係も、また、もし途中で組替えがないとするならば夫婦関係も、親の世代とは比較にならないほど長期にわたるものとなり、個人の生活に対する影響もそれによる葛藤も増大している。人生が長くなるほど、特定の枠組みのなかでのみ生きることが困難になり、「これまでの家族のように、夫・妻・父・母・子といった位座を整えることが基準となることによって、全体社会のなかで自己の存在証明を求める個人を支援することができのだろうか」(目黒、1987)という疑問も提起されてくる。経済的に発展し、福祉をはじめとする社会制度の整備された豊かな社会は、一方で多様な価値観を容認する社会であるが、他方

で標準化の進む社会でもある。すなわち、「学校教育の長期化、一定の年齢で結婚することが可能な経済的安定、健康管理システムの整備、長寿化などは比較にならないほど多数の人々の生き方を標準化することにつながる。と同時に、長期化した人生は、成人期を長期化したわけで、大人になってからの生き方を選択する、また選択しなければならなくなる」(目黒、同上)のである。

そこで本稿は、長寿社会化の方向にもなう個人の人生の多様化と家族の変容、個人の選択肢としての家族生活という認識のもとに、個人の持ち時間の伸びと個人の生き方の標準化の方向、個人の多様な生き方への志向と集合体としての家族システムの維持、さらには個人、家族、職場、学校、全体社会の間での時間の競合とギャップなど、個人・家族・社会の連関を「時間」の観点からとらえる、家族研究の新たな分析視角とその発展的可能性を提示してみたい。

2. 家族と「時間」

1) 時間の意味

われわれは、誕生から成長、老化をへて死に至るまで、時間の経過とともに、人生の過程を進んでいく。そこには、生理的な時間スケジュールが存在しており、人間は誰でもその規制の外におかれるものではない。われわれは、誕生から死に至る全過程を時間の規制のなかにおかれているのである。しかし、人間の成長・発達過程は、生理的な要件に基礎づけられながらも、社会的、文化的環境からの影響をきわめて強く受けることはよく知られている。つまり生理的な時間は、社会的・文化的な時間スケジュールと歴史的な出来事に規制されて存在している。その意味で、われわれの人生は、生理的、社会的、文化的、歴史的な時間の諸次元から成り立っているといつてよいだろう。⁽³⁾

ところで時間は、個人にとってもまた社会（集合体）にとっても、財（貨幣）、サービス、情報、愛情などと並ぶ、有限で、それゆえ希少な資源として考えることができる。「それ故、個人も集合体も時間という資源をそれぞれの目的・目標の実現に向けて有効に使用するという課題に常に直面している」（正岡、1985）。現代社会においては、こうした希少な時間という資源をめぐる、個人と個人、個人と特定の組織、特定の組織間、あるいは個人と全体社会とが、熾烈な競争を展開している。時間の希少性は、単一時間に対する潜在的な請求量が増加すればするほど高まるといわれている。産業化した社会においては、人々は多数の集団に所属し、しかもそれぞれにおいて高度に分化した機能を担うがゆえに、競合し合う組織の時間にたえずさらされている。すなわち、「時間が有限である以上、全ての需要を完全に満足させることは不可能であるから、さまざまな活動をめぐる時間の請求権が競合することになるのである。同時に、社会的分化の結果、成員資格を異にし、成員の専属を要求する諸々の組織が、個人時間の在庫の確保をめぐる競合することになる」（ムーア、1963）。このことは従来、役割葛藤の問題として認識されていたことである。人々の寿命が伸び、その点では個人時間の在庫が以前より増加したにもかかわらず、競合しあい、細分化された過密なスケジュールのなかを忙しく移動する現代人は、時間の有限性と希少性をより痛感させられることが多くなった。持ち時間の絶対量の増加は、必ずしも時間のゆとりとは結び付かず、むしろ逆説的に、時間の配分をめぐるより苛烈な競合に長期にわたってさらされる結果となっている。その意味では、時間の次元に、主観的・心理的次元を付け加えなければならぬ。

さて、こうした時間をめぐる葛藤は、産業社

会にあっては、職場と家庭の緊張として典型的に知られている。職業組織が個人に課する時間請求と、家族組織が個人に課する時間請求はしばしばぶつかり合い、たいていは、職業組織の方が第一優先権を確保する。「母親の就労と子育て」、「父親不在」、「単身赴任」、「家庭の教育機能の低下と非行」、「仕事と結婚した夫と「仕事ウイドウ」の妻の離婚」など、現代の家族問題として語られる現象の多くは、時間の配分と競合、およびタイミング（時機調整）の問題として理解されよう。そこで次に、タイミングについて考察してみることにする。

2) タイミング行為の共時化

社会行為は、役割、あるいは相互作用の概念を用いて分析されるが、それはまた時間の取引として考えることもできる。取引であるとするならば、他者（個人または集合体）の時間請求に対する個人時間の投下量と投下の優先順位の妥当性あるいは適切性と並んで、取引の、すなわち相互作用の開始と終了の妥当性と適切性が問題になるであろう。

社会変動に関する優れた考察で知られるムーアは、あらゆる社会体系に影響を及ぼしている基底的条件として、「人員」＝社会の人口統計学的次元と、「空間」＝人口の静態学的集中と分散、および「時間」＝生活の時間的境界と一定の順序に従った行為の整序をあげているが、なかでも時間の問題に意欲をそそられ、早い時期に、時間についての社会学的な考察と概念整理を試みている。そのなかでとくに社会変動とかかわる要素として、タイミングに着目している。このタイミングを構成しているのは、共時化（synchronization）、順序（sequence）、進度（rate）の三つの下位要素であるとムーアは指摘する（ムーア、同上）。簡単にいえば、共時化とは行為の同時性、順序とは行為の優先

順位、進度とは行為を進行させるスピードのことであると説明されている。タイミングには、短期の時機調節と、ライフサイクルにおけるかなり長期的な時間戦略を含む時間の整序化との二様があるが、いずれにせよタイミングの中心的な要素は、「共時化」にもとめられる。実際、あらゆる相互作用とシステムの維持にとって、行為の共時化は不可欠の要素である。「共時化に含まれる時間秩序の性質は、協同や社交、あるいは情緒的結合のための時間調整および時間厳守の要求である」（正岡、同上）。ムーアは、短期の共時化の例として、工場での交代制勤務、家庭での一家そろっての食事、パーティー、性交でのオルガスムスなどをあげている。

産業化以前の社会にあっては、辺り一帯に鳴り渡る教会の、あるいは寺院の鐘の音が、人々の生活のリズムと、共同体の秩序の象徴であった。有名なミレーの『晩鐘』は、「音」による祈り（一日の仕事の終わり）という行為の共時化をみごとに描き出していると、加藤は指摘している（加藤、1987）。今日では、もっと「正確」に、もっと「細か」く行為の共時化がみられる。ビジネスマンの黒皮の手帳には、何カ月も先までの時刻表がびっしりと書き込まれ、彼らは、細分化された時間のなかをさまざまな「相手」との共時化のために走り回るのである。一般的に、組織の巨大化と官僚制化の進行とは、特定の行為の共時化をきびしく要求するようになる。つまり、「時間厳守」の規範の浸透である。

分業における協同体制のもとでは、ある部分の「進みすぎ」や「遅れすぎ」、あるいは部分の勝手な手順変更には、たいていなんらかのサンクションが用意されている。なぜなら、一部の共時化の失敗は、直ちにシステム全体の共時化に影響を与え、システムの機能障害を引き起こすかも知れないからである。産業社会におい

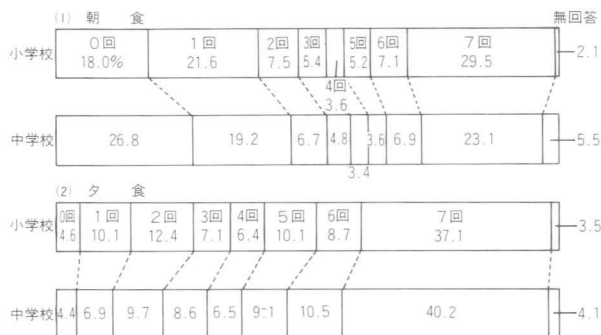
て、行為の共時化をもっともきびしく要求しているのは、職業システムと教育システムである。これらのシステムにおいては、あらかじめ決められた時間スケジュールを成員に強制する。しかもこのスケジュールは拡大する傾向をもつ。たとえば、教師は宿題を課して、学校の時間スケジュールを家庭に浸透させることができるし、上司（あるいは職場の規範）は、仕事のスケジュールに共時化させるために「遅れている」者に残業を促したり、場合によれば、休日に接待ゴルフに駆り出すかも知れない。つまり、たとえ空間的には会社や学校を離れていても、個人はその組織の成員として、その時刻表のなかで行為しているのである。かくして、産業社会において発達し、強力に共時化を請求する二つの主要な社会システム—職業と教育の時間に侵食され、家族は「残余時間の請求者」⁽⁴⁾の地位に追いやられたのである。

3) 「残余時間の請求者」としての家族

家族の共時化の典型は、食事である。家族そろっての食事の風景は、今日まで家族のまとまり、家族の絆の象徴であった。しかし、図1と2が示す通り、今日では家族全員がそろって食事をするのが「あたりまえ」ではなくなってきた。成員が家族以外—とりわけ、職場と学校—の時間スケジュールにより強く拘束され、家族員の生活時間がまちまちであることが主たる要因である。図3、および図4は、ある労働者家族の時間表であるが、これで見ると、食事はおろか夫婦の会話さえ成り立ちがたい現状がわかる。こうした組織時間間の非同調によって家族生活は寸断されており、家族時間の現状は、制度的な組織の時間のいわば「残余」の時間を拾い集めて組み立てられているといえることができる。

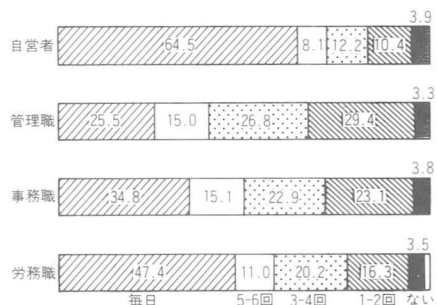
こうしたことから引き起こされる現代的な現

図1 1週間に家族全員そろって食べる回数 その1



出所) 日本学校健康会、1983、「家庭の食事状況調査」より。

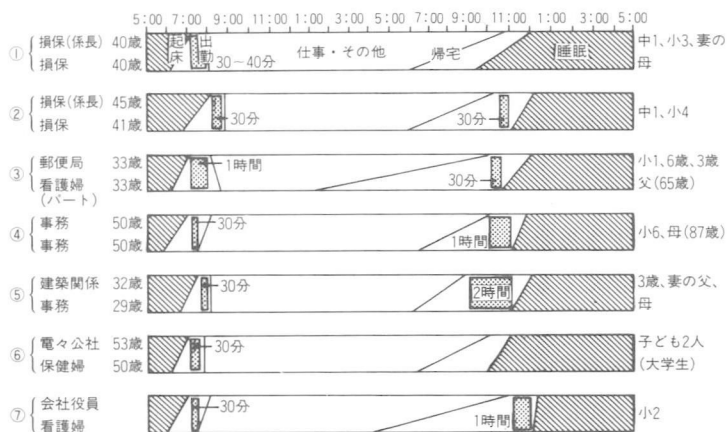
図2 家族そろって食べる夕食の回数 その2



出所) 『国民生活白書』1984年。

注) 1.総理府広報室「父親の意識に関する世論調査」(昭和57年)による。
2.「あなたは、通常1週間に何回ぐらい家族そろって朝食や夕食をとりますか」の「夕食についてはどうでしょうか」の問いに対する回答割合である。

図3 労働者家族の夫婦の生活時間



別表 夫と妻の物理的な共有時間

ケース番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
家族一緒に夕食(週)	0日	1～2日	2日	1日 (日曜日)	2日	1～2日	1～2日
夫婦2人で過ごす時間	0時間	ほとんどなし	ほとんどなし	ほとんどなし	1～2時間	ほとんどなし	1～2時間
家族全員が顔をあわす時間	朝食30分	朝食30分	朝食30分	朝食30分	朝食, 車のなか	日曜日位	朝食20分
夫の平均「在宅時間」 (うち睡眠時間)	9.5(7)	10(8)	10(7)	10(7)	10.5(7.5)	9.5(7)	9(7)

出所) 北海道教育大学札幌分校社会学研究室「共働き家族の実態調査」(札幌市, 1984年)より。

象が、「ホテル家族」化である。数年前に『家族ゲーム』という映画がちょっとしたセンセーションを巻き起こしたが、これは、中年夫婦と高校受験をひかえた少年と高校生の兄の、「典

型的」な中産階層の家族のありふれた家庭の様子を、少年の家庭教師をからませて描いたものだが、「ホテル家族」をみごとに描いて秀作であった。子どもたちは、別々に学校から帰宅

図4 T自動車労働者家族の生活時間

家族構成（夫41歳……時差勤務、妻39歳……パート、子ども12歳……中学生）

夫・平日・時差勤務	22:00 ↓ 8:00	仕事			移動	食事	休養	睡眠					T休息	V養	身のまわり	食事	休養	移動	仕事					
	12:00 ↓ 21:00	睡眠	食事	T休息	V養	休養	移動	仕事					移動	食事	T休息	V養	就寝							
	6:30 ↓ 15:30	起床	食事	移動	仕事					移動	新聞など	休養	食事	T休息	V養	身のまわり	就寝							
	5:00	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	1	2	3	4
妻・平日		睡眠	炊事	食事	炊事	洗濯	移動	仕事					移動	買物	炊事	食事	炊事	T休息	V養	身のまわり	就寝			
子ども(中1)		・登校							(冬)下校		(夏)下校						・就寝							

出所) 職業・生活研究会「豊田市M町地域調査」1985年3月。

注) 1. 妻(平日)は、夫の勤務時間帯が6:30-15:30の週のものである。

妻の生活時間は、夫の勤務時間帯の変更にしたがって、夕方の家事・食事・就寝時間が変わっていくが、いちおう「朝勤」が軸となって変化するものとする。

2. 子どもの生活時間は、中学生の生活実態(「部活」「朝学」)のために、6時45分登校、下校は「日没」を基準とし、夏は7時すぎ、冬は4時半頃、毎日の課題には2-3時間を要する。土、日のほとんどは学校行事が組まれ、家にはいない。下校後の友だちとの往来は禁止されている。塾に行く時間はほとんどない——1981年11月のヒアリング——を参考にして付け加えた。

3. この図には、夫の残業時間が含まれていない。この事例の場合、実際は週2-3日、2-3時間の残業が組みこまれている。「これがなかったら食べていけない」とただし書きがある。

し、帰宅するとすぐに自分の部屋にこもる。兄弟で話をするわけでもない。ときどき母親のところにおやつを要求しに部屋から出てくるぐらいで、各自がかってにめいめいの部屋で過ごしている。父親は仕事でたいい帰宅が遅い。母親はというと、ひがな一日家にいるのだが、つねに夫と子どもたちの時間スケジュールに合わせる「待ち」の時間しか持てない。ここでは、各自がめいめいの時間を生きており、母親が自分も好きなように時間を使いたいという不満を持っていることを除けば、争いもなければこれといった「問題」もない。つまり、家族の共時化がほとんどみられないし、そのことを特に苦にもしていないのである。小此木は、「ホテル家族とは、家庭をなんでも思うようなサービスを受けることのできる高級ホテルとみなし、自分たちはみんなお客様と思いつ込んでいる家族である」(小此木、1983)と説明している。しかもこの家族たちは、こころの憩いの場所として

の家庭をとても美化しているのである。「それぞれ自分の好きな部屋を持ち、その部屋にいろいろな便利な道具があって、自分本位に暮らすことができる。家庭にはなんの義務もないし、責任もない。……ちょうどそれは高級ホテルに泊まっているようなものである。家族同士の気持ちのやりとりはほとんどないから、感情の争いも起こらない。お互いに干渉し合うこともない。……多くの場合、妻=母親が、これらの家族の世話をする。誰もそれがあたりまえだと思うことで、家族らしいまとまりを保っている」(小此木、同上)のである。『家族ゲーム』は、そこに描かれた家庭のホテル化が、けっして特異でも近未来のものでもなく、われわれが日常比較的なじんでいる家族の「現実」であることを思い知らせる。ここには、もはや「残余の時間の請求者」としての側面すら放棄した家族の姿が浮き彫りにされているのである。

ところで、この共時化の問題は、ライフサイ

クルに即しても論ずることができる。そこで次に、ライフサイクルとタイミングの問題について、若干ふれておくことにする。

4) ライフサイクルとタイミング

ライフサイクルとは、本来、生物の生命周期的ことである。すなわち人間の場合には、加齢にともなって進む成長と老化の生理的な時間の流れを指すが、人間の生理的な時間は、進み方もまたその絶対量も、社会的・文化的な影響をたぶんに受けることはすでに指摘した通りである。この生命周期的は、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期といったように区分化される。長期化した成人期はさらに、成人前期、中年期と細分化されることもあり、また老年期も老年前期、老年中期、老年後期といったように分けられることもある。これらの区分が、生理的な時間に基づきながらも、社会的、さらには歴史的な時間を色濃く反映していることはよく知られている。たとえば、青年期や老年期が出現したのも、子供期や成人期が細分化されたのも、産業化や人口変動、教育制度や職業制度の変化などの結果である。また、どの時期に何が期待されるかということも、社会の変化に対応した年齢規範の変化に応じて変わってくる。したがって、こうした意味でライフサイクルは、単に個人の生命周期的というよりは、社会生活上の経験や期待を反映した生活周期としてとらえ直すことができる。

さて、生活周期としてのライフサイクルのタイミングは、生理的時間、社会的時間、歴史的時間の少なくとも三つの位相を考慮しなければならない。親からの自立、結婚、第1子の出産、子どもの数と出生間隔といった家族時間の戦略は、個人のライフサイクルと密接に関連している。結婚も出産も個人の選択的事項となり、またいつでも望むときにその選択が可能と

なった現代において、こうした時間戦略は、一層重大な意味を、個人にとっても集合体にとってもまた全体社会にとっても、もつようになった。女性の社会的進出を促した一つの要因は教育の長期化であるが、教育の長期化はまた、女性の相対的な晩婚化をもたらし、女性の相対的な晩婚化は、第1子の出産年齢の高齢化をもたらし人口変動の遠因となると同時に、結婚—出産の期間と順序に影響を与えた。つまり、教育という社会的時間のスケジュールが出産という生理的時間を遅らせ、生理的時間の遅れは、人口変動という歴史的時間と、家族組織化上のプランニングとしての家族時間のスケジュールとに影響を与えたのである。タイミングと時間戦略を、家族変動や社会変動の分析に用いる視点は、ムーアの功績によるところが大きいのが、それを本格的に展開させたのは70年代に登場したライフコース分析の視角である。では、ライフコース論と家族研究の結び付きはどのようなものであろうか。次にそのことをみていきたい。

3. 個人・家族・社会変動

—ライフコース論と家族研究—

1) 家族周期論からライフコース論へ

家族研究においては、比較的早い時期から時間とのかかわりを有する研究視点が提起されてきた。時間に着目した最初の研究として代表的なものとしては家族周期論がある。家族は従来、誕生—成長—老化—死といった人間の生物学的営みときわめて強い結び付きを有しており、生物学的な生命周期的の考え方と親和性が高かったことは事実である。ライフサイクルの考え方を社会生活に適用した最も初期のものとしてよく知られているのが、都市労働者の生活を貧困の問題に焦点をあわせて研究し、労働者の一生の経済的浮沈の規則性を明らかにしたイギリス

の経済学者ラントリーの業績であろう。ラントリーの場合、その関心は個人の生活周期における経済状態の規則性の析出であったが、同時に個人の経済状態が、個人をとりまく家族の構成および労働力状態と不可分の関係にあることを示し、ライフサイクルの考え方が、家族と結び付きやすいことを知らしめたのである。ついで農民家族の時間的展開の規則性について論じたロシアの農業経済学者チャヤノフの影響を受けて、亡命ロシア人の社会学者ソーローキン、ジンマーマンやギャルピンらと共に、アメリカの農場家族の家族構成の発達段階に応じて農場面積や暮し向き加減に規則的な変化がみられることを明らかにし、以後アメリカの家族社会学において活発に展開されることになる家族のライフサイクル論、すなわち家族周期論の端緒を開いたのである。

家族周期論の特徴としては、①家族を時間的推移にしたがって段階（ライフステージ）設定する。（ライフステージの基準としては、結婚、子供の出生と離家、第1子の成長段階、夫の退職が用いられることが多い）②各周期段階の家族は、それぞれに達成すべき発達課題を有する。③この各段階は、規則的に繰り返されるパターンを示す、というものである。こうした周期論的な考え方は、制度的な理念型だけを論ずる従来の静態的な立場を乗り越え、家族は時間の経過と共に、構成も役割構造もまた機能も変化させ、家族が集団として担う課題も家族の発達段階に応じて変化することを明らかにした点で画期的であった。また、家族には各段階に応じた固有の課題があること、家族員はそれぞれの段階でその課題を達成することに努力すること、ある段階から次の段階への移行に当たっては、つねに組織の再調整を要することなどの明示は、家族と福祉、ないしは社会政策とを結び付ける実践的な視点を提供した。

ところで、いくつかの点で家族研究を前進させた家族周期論は、60年代の後半ごろから方法的なデッド・ロックに突き当たることになった。その最大の理由は、アメリカ社会でそのころから顕著になり始めた、前述の家族の個人化と多様化である。家族周期の各段階は、制度的なモデルな家族をモデルとしたものであり、いわば規範から外れた家族や非家族生活者は、例外や逸脱とされ、対象から除外されていた。しかも家族は、同一の階層やコミュニティ、世帯主の職業、出生コーホート（後述）といったカテゴリーにおいて、どれも同一の周期パターンを有するという前提にたっており、カテゴリー内の変異は無視されていた。さらに家族周期論では、家族は明確な集団として成立し、また個人は結婚後一つの家族にだけ所属し、家族の各段階は連続したものであり、個人は各段階を一定の順序で推移することが含意されていた。60年代後半以降のアメリカ社会で夫婦の約4割が離婚し、その4分の3が再婚するという現実の前に、「死が二人を分かたずまで」永遠の愛で結ばれた夫婦と子供たちからなる核家族の神話は崩壊し、家族を集団としてではなく組替え可能な関係の集積態としてとらえる視点が、急速に台頭してきたのである。さらにいえば、家族周期の段階設定に用いられるデータがもっぱら横断的データであることへの調査手法上の批判もまた、家族周期論に代わる新しい分析手法の出現を期待することを促したことも事実である。ライフサイクル論の成果を取り込みつつ、変動をとらえうる新たな視角として登場したのが「ライフコース」の考え方である。

2) ライフコース分析の特徴

ライフコースとは、人生の軌跡すなわち誕生から死までの個人の人生の全過程の道筋を意味している。この言葉には、非反復性、方向性

(時間の矢)、多様性の観念が含意されている。言い換えれば、「かけがえのない」個人の人生は、世代的に再帰する「サイクル」ではなく歴史のなかで歩まれる「コース」であり、しかも、個人個人が独自の多様な軌跡をたどると同時に、それらの軌跡は社会や時代の影響を受けるがゆえに、同じ影響を受けたものには一定の共通性・規則性が存するという理解が含まれている。

ところで、ライフコースの分析視角は、生涯発達心理学における一生涯にわたる加齢過程の研究を源泉としたものである。そこでの中心的な前提は、以下の四点であった。①発達的变化は受胎から死亡まで生涯にわたる継続的過程であって、どれか特定のライフステージに限られるものではない。②発達的变化は生理的過程・心理的過程および社会的過程のセットからなり、これら三つの過程がライフコースの全期間にわたって組織的に相互作用する。③どの個人のライフコース・パターンも、社会的環境的变化によって影響される。④ライフコースの新しいパターンが社会変動に影響する。さて、ライフコースがライフサイクルの視点と大きく異なる点は、発達の多方向性・可変性の強調と、人間発達と社会環境条件ならびに歴史とのたえざる相互作用への着目であった。この点が、ライフコースを、家族の集団性が自明のものではなくてきたという認識にたち、家族変動と社会変動とのかかわりをとらえる新たな視点を模索していた家族研究の立場と急速に結びつけたのである。すなわち、家族もまた個人のライフコースを形成する一領域にすぎず、家族は、複数の個人のライフコースの家族的領域における集積態であり、しかもそれは歴史とたえず相互作用しているとの視角がそれである。個人の人生過程を視座にすえたライフコース分析の中心的視角としては、以下の三点に要約できよう。

(1) 個人の人生を、生涯発達という観点からとらえる。

(2) 個人の人生を、役割移行の過程としてとらえる。

(3) 個人の人生を、社会的、歴史的変動とのかかわりでとらえる。

生涯発達の観点には、加齢にともなう個人の発達的变化は一生を通じてみられるもので、その意味で一生のどの時期も前の時期から影響を受け後の時期に影響を与える、また、発達は一方向的なものではなく、多岐的、可逆的なものである、という考え方が含まれている。これは家族研究との関連でいえば、ある家族現象は以前の出来事からの影響を受け、また以後の出来事に影響を与えるという視点を提供する。たとえば早婚(十代の結婚)は、人種、宗教、地域性、親の階層などの出生時の社会的条件に加えて、親子関係の不和、学校での不成績など、結婚に先立つ先行条件に規定されており、また早婚は高い離婚率と相関するなど結婚以後の現象に影響を与えるといった知見⁽⁵⁾は、ライフコースの視点にたつ研究から提示されたものである。

また、個人は加齢にともなってさまざまな役割を取得、放棄、あるいは修正、転換をしており、その一連の過程を役割経歴(キャリア)として把握する。その意味で、個人の一生は複数のキャリアの束だと考えることができる。主要なキャリアとしては、家族キャリア、職業キャリア、教育キャリア、地域キャリアなどがあげられる。これは、家族現象をたえざる役割変容の過程とみなす新しい分析視角を提供した。また、個人の人生をキャリアの束とみなすことによって、家族キャリアにおいて生ずる現象が、他のキャリア、たとえば職業キャリアとか教育キャリアにおいて生じる出来事から影響を受け、またそれらに影響を与えるという視点を提

供することによって、キャリア間の相互連関、つまり社会システム間のインター・ロックの状況を分析することを促したのである。さらに、個人の人生をキャリアの束とみなす視点には、家族キャリアは個人の諸キャリアの一つにすぎず、必ずしも家族キャリアでの役割関与の大きくない、あるいは家族キャリアをもたない人生上の時期がありうるということが想定されており、離婚あるいは再婚も個人の家族キャリアにきちんと位置づけられるべきものであるという考えとともに、離婚・再婚家族や非家族生活者を例外として対象から除外しないということが前提となっている。つまり家族研究において、一部の精神医学や精神分析を除いては、これまで「家族における個人」を想定した分析手法を発達させてきたが、ライフコースの視点は、「個人における家族」という観点の転換をとまなうものである。では、これらの点をふまえたうえでライフコースと家族、および家族変動の分析についてみていこう。

3) ライフコースと家族変動

さて、個人の発達や役割移行は、歴史的時間のなかに位置づけられてはじめてリアリティをもちうる。ライフコースでは、加齢過程（暦年齢の移行過程）にともなう個人の時間スケジュールを「個人時間」ととらえ、それと「社会時間」、および「歴史時間」との相互関連性を分析しようとする視点を含んでいるが、こうした次元の異なる時間間の位相と同調への着目こそライフコースと変動とを結び付けるもう一つの重要な視点といってよい。社会時間とは、一つには、年齢に対する社会規範の意味で使われるが、いま一つには、家族時間、企業時間といったように、特定の社会的単位に固有の時間スケジュールをさして使われる。ここで特徴的なのは歴史時間の概念であるが、これは、第一に、

出生率・死亡率・結婚率・平均寿命などの人口学的変化、産業化や都市化、経済水準の変化、教育の普及や家庭外への女性の就労といった社会参加のあり方の変化、男女同権思想や個人主義的観念の普及などの価値観の変化といったような全体社会レベルでの通時的変化、第二に、戦争や大災害や恐慌といった歴史的出来事の二つの次元から構成されるものとして考えられる。ライフコースでは、個人の発達やキャリアは、社会時間や歴史時間から枠付けられていると同時に、ライフコースの新しいパターンは社会変動に影響を与えるという立場をとる。ところで、もし同時代の人々が同じ歴史的出来事に遭遇し、その影響を受けているとすれば、同一社会の同じ年齢の人々には共通の歴史体験、共通の歴史的刻印が認められるはずである。これはマンハイムの「世代」概念にきわめて近いものである。この仮定が、ライフコース研究と歴史人口学の手法との結び付きを可能にした。すなわちコーホート分析がそれである。

コーホートとは、人口学的には通常、出生時期を同じくする統計的な集団のことである。これはまた、「ライフコースを通じて一緒に歩む集団であり、同じ歴史体験を共有している集団」（クローセン、1986）でもある。多様で個別的なライフコースを生活史法から離陸させ、異なるコーホートとの比較や、特定のコーホートへの着目、さらには同一コーホート内のバリエーションの析出を通じて、社会変動や社会分析と関連せしめる新しい分析視角たらしめたのは、このコーホート分析であった。コーホート分析を採用することによって、条件を同じくする特定のライフコースをパターンとして析出することに成功した。たとえば、アメリカで1920年に生まれた男子は、1930年の大恐慌には思春期をむかえ、1941年に始まった戦争に多くは徴兵された。しかし、1930年に生まれた男子は、

幼年期に大恐慌を経験し、戦争には若すぎて徴兵されなかった。異なる年齢において歴史的出来事を体験した二つのコーホートは、異なるライフコース・パターンを描き出したのである。さらにコーホート分析は、同一対象の時系列分析、すなわち同一個人の時間の流れを追う縦断的データの分析と結び付くことになる。たとえばエルダーは、1932年に中学生を対象としてその後30年にわたって続けられた彼らの成長の記録と、1928、29年生まれの人々の同じく年齢縦断的な記録とを比較することによって、大恐慌と戦争の意味はこの二つのコーホートで異なっており、この違いは結婚や職業生活にはっきりと現れていること、また大恐慌当時の家族状況や親の職業階層の違いによって、影響の受け方には相違がみられることを鮮やかに提示してみた（エルダー、1974）。

さらに、ライフコース分析において重要なもう一つの視点は、タイミングへの注目である。「ライフコース分析の視点は、まさしくこの時間という資源の交換・贈与をめぐる相互作用に焦点をあてて、個人、集合体、全体社会、そして歴史を『総合的、包括的』に分析しようとするところに基本的な特徴がある」（正岡、同上）。つまり、ライフコース・パターンの歴史的変化の分析にとっては、個人が各自の役割遂行や役割移行において時間的資源をいかに計画的に使用し、組織化したか、またこの資源の使用にあたってどのような社会的影響を受けたか、いかなる価値規範が時間資源の使用を条件づけたかが、もっとも重要な問題だと正岡は指摘する（正岡、同上）。歴史的な観点からライフコース分析を進めたハレーブンは、「ライフコース・アプローチは、タイミングの問題に収れんする。すなわちそれは、個人時間、家族時間、および歴史時間の相互間の理解である。」（ハレーブン、1982a）と述べて、タイミングの概念

を重視している。とりわけハレーブンは、個人時間と家族時間の共時化、およびそれに対する歴史時間の影響に関心を寄せている。ここでの個人時間とは、個人が経験するライフコース上の役割移行の過程をさし、また家族時間とは、家族が組織として実現しようとする時間スケジュールおよび戦略をさしている。

ところで、個人の役割移行は、今世紀初頭においては家族内の地位・役割に強く規定されており、個人のライフコースと家族上の役割経歴は相互に規定的な関係にあった。ここに、「家族の様態は個々の成員のライフコース上の役割移行の共時化によって多様に変化する」という仮説が導き出される。そして、個人の役割移行と家族の様態とは、あたかも「魚群の運動」のように連動するとみなされる。この概念と考え方を用いて、今世紀初頭のアメリカの特定大企業の労働者の家族と企業との相互作用を克明に描き出し、産業化過程と家族の変容について、核家族が産業化に適合するという従来の通説をくつがえす知見をデータによって提示したのみでなく、産業化の初期において、家族と近親のネットワークが職場活動や職業生活の安定に積極的な役割を果たし個人のライフコースを安定させていた反面、いつ結婚するか、結婚後はどこに住むか、いつ家を離れるか、どこに就職するかといったことなどを含めて、個人のライフコースは家族のスケジュールと戦略とに大きく規定されていたことを示してみせたのである。彼女はまた、個人の役割移行のタイミングが1930年代を境に、家族時間への共時化から次第に社会的な年齢規範への共時化に移行してきたという、重要な指摘も行っている。

上述したエルダーやハレーブンを始め、家族変動に関心をもつ多くの研究者がライフコースの視角に着目し、あるものは過去のデータを整理しなおし、あるものはデータづくりに着手し

始めている。ライフコース・アプローチによる家族研究はようやく緒についたばかりだといえるが、縦断的なデータの収集、コーホート分析、タイミングとしての役割移行、出来事や行為および特定の時間への共時化、共時化を促す規範の変化など、新しく開発された方法や概念は、個人化の度合を強めている多様な形態の現代家族の研究にとって、大いに注目すべきものであらうと思われる。

4. 現代家族の分析視角—まとめにかえて—

これまで述べてきたことがらのなかから、現代家族にアプローチするために、ここでは「共時化」と「時間戦略」の二つに着目してみたい。ここでいう共時化とは、行為の同時性および異なる時間位相間の時機同調のことであり、時間戦略とは、時間資源の順序づけとタイミングにかかわるプランニングのことである。

「ホテル家族」に象徴されるように、現代家族は個人化の傾向を強めているが、時間の観点からこれには二つの理由が考えられる。一つは、家族以外の官僚制的なシステムの時間の家族時間への侵食であり、いま一つは、個人の目標や個人のライフプランにしたがってライフコースを選択し（個人時間の重視）、他の家族員のライフコースとの時機調節（家族時間との共時化）を二義的に考える時間戦略の一般化である。言い換えれば、前者は制度的システムへの共時化の強制であり、後者は個人時間ないしは社会的な年齢規範への共時化の志向である。こうして家族システムを維持するための家族時間は、いわば外からも内からも切り崩しをはかられているといえるのである。

ところで、システムの維持と強化は、それに参加する個々の成員が、自らの時間資源をシステムの活動に恒常的、規則的に投下することを要件としている。すなわち、システム固有の時

間戦略へのなんらかの共時化を必要とする。先に述べた家族外の制度的なシステムは、この要件をきわめて明確、かつ強力に要請するが、家族もシステムである以上、程度の差こそあれ、その維持のためには、個々の成員の家族時間への共時化を要件としている。したがって、家族時間への共時化の困難、あるいは共時化の規範の弱化は、家族システムそれ自体の解体の危機を常態として内包していることになり、その意味でこうした家族の状況は、潜在的家族崩壊⁽⁶⁾とみなさざるをえない。

さらに、教育制度や職業制度、および公的制度の整備・発達は、個人の時間スケジュールにおける年齢規範への共時化をより強く促すことになった。すなわち、全体社会のレベルからみれば、年齢規定的な分局化の進行である。就学、進学、就職、定年制における退職、および老齢年金の受給資格開始などの出来事は、より年齢共時的となり、それにとまうライフコース上の重要な役割移行を、同一コーホートの人々はますます画一的に経験するようになっていく。つまり、個人のライフコースの標準化の進行である。この年齢規範への共時化の強化と家族時間への共時化の弱化は、家族の世代間の相互作用を弱め、家族の世代的分断化を促すように作用してきたとハレーブンはいう。ハレーブンはまた、現代アメリカの老人たちの孤立化を、全体社会の構造的な年齢分化の反映だとみなし、そうだとすれば、「孤立化の現象は老人世代に固有のものではなく、現代アメリカ人の全てのライフコースの各段階にみられる一般的な現象として解する必要がある」（ハレーブン、1982b）ことを指摘している。つまり、「孤立化」は老年期だけでなく、児童期、青年期、成人期の問題でもあるというのである。長寿社会における公的福祉の拡充が（それが年齢別分化の構造をもつ限り）、世代を分断し、老人世代

をはじめとする各世代の世代的孤立化を促進するというのは皮肉である。

以上の諸点からみる限り、現代家族のおかれている状況は、システムとしての存続の危機に直面しているといっても過言ではない。家族はどの程度「危機」なのか？ こうした状況は、日本ではいつごろから始まり、また今後どのような方向をたどろうとしているのか？ 個人にとって、家族とはいかなる存在なのか？ これらの質問に答えるためには、過去と未来にわたるデータをライフコースの視角において収集し、縦断的な分析をいまだし忍耐強く行う必要があるかと思われる。緊急の課題が手っとり早い方法で解決できるとは限らない。家族が今日もまた将来も、「基礎的社会集団」でありつづけるかどうかは、個人が、家族と呼ばれるカテゴリーに対して、いかなる時間戦略を選択するかにかかっているものと思われる。

注

- (1) 「現代家族とは、時間的規定において家族をとらえたときに概括される最も新しい時代の家族、観察者と同じ時代の家族(contemporary families)を意味している」という森岡清美の考え方にしたがう。最近では、とくに1960年代以降の家族をさして用いられることが多い。
- (2) ライフスタイルとは、人々の生活、行動、思考などのパターンの文化的・社会的レベルでの差異を示す概念であり、現代用語として定着しているが、その起源は、社会学ではM. ウェーバーの生活態度 (Lebensführung) の概念にまでさかのぼる。
- (3) 時間の次元にはいくつかの考え方があり、生理的、心理的 (主観的)、社会的時間の三次元に分けたムーア、生涯時間、社会的時間、歴史的時間に分けたニューグーテンら、自我時間、相互作用的時間、制度的時間、文化的時間の四つの次元に分けたルイスら、宇宙的時間、生涯時間、社会的時間に分けたパークスら、文化的に確認しうる時間として、九つの種類に分けたホールなどがある。また正岡寛司は、個人のライ

フコースと社会構造との相互関係の考察のために、①生物的・生理的時間、②個人的・自我的時間、③相互作用的時間、④制度的・組織的時間、⑤文化的時間、⑥歴史的時間の六つの時間次元を提示している (正岡, 1987)。

- (4) W. E. ムーアの用語 (Moore, 1963)。
- (5) Otto, Luther B., 1979, "Antecedents and Consequences of Marital Timing", Burr, W. R., Hill, R., Nye, R. I. & Reiss, J. L. eds., *Contemporary Theories about the Family* vol. 1, The Free Press, pp101-126
- (6) 山根常男が、『ゆれうごく現代家族』(1984) 上梓にあたって、執筆者間での共通認識として紹介している。

引用および参考文献

- Clausen, John A., 1986, *The Life Course: A Sociological Perspective*, Prentice-Hall Inc, (佐藤慶幸・小島宏訳, 1987, ライフコースの社会学, 早稲田大学出版部)
- Elder, Glen, H. Jr., 1974, *Children of the Great Depression: Social Change in Life Experience*, The University of Chicago Press. (本田時雄他訳, 1986, 大恐慌の子どもたち—社会変動と人間発達—, 明石書店)
- Hareven, Tamara K., 1978, "The Dynamics of Kin in and Industrial Community", *American Journal of Sociology*, Supplement, pp 151-182.
- Hareven, Tamara K., 1982a, *Family Time & Industrial Time*, Cambridge University Press. (正岡寛司監訳, 1990, 家族時間と産業時間, 早稲田大学出版部)
- Hareven, Tamara K., 1982b, *Aging and the Life Course in Interdisciplinary and Cross-cultural Perspective*, Editor, Guilford Press.
- Moore, Wilbert E., 1963, *Man, Time, and Society*, John Wiley & Sons Inc. (丹下隆一・長田攻一訳, 1974, 時間の社会学, 新泉社)
- NHK世論調査部, 1985, 日本人の生活時間, 日本放送出版協会
- 小此木啓吾, 1983, 家庭のない家族の時代, A B

C出版

- 加藤秀俊、1987、時間意識の社会学—時間とどう
つきあうか—、PHP研究所
- 笹谷春美、1986、「労働者家族の夫婦」、布施晶子・
清水民子・橋本宏子編、現代家族の危機
と再生1、現代の夫婦、青木書店
- 生命保険文化センター編、山根常男監修、1984、
ゆれ動く現代家族、日本放送出版協会
- 正岡寛司、1985、「歴史的ライフコース分析の視
点」、森岡清美・青井和夫編著、ライフ
コースと世代—現代家族論再考—、垣

内出版

- 正岡寛司、1987、「ライフコースの変化と社会的コ
ンテキスト」、森岡清美・青井和夫編著、
現代日本人のライフコース、日本学術
振興会
- 正岡寛司・望月嵩編、1988、現代家族論、有斐閣
- 目黒依子、1987、個人化する家族、勁草書房
- 三沢謙一他著、1989、現代人のライフコース、ミ
ネルヴァ書房

(いわかみ まみ、本学科専任講師)